

2026 8/21 [金]—9/20 [日]

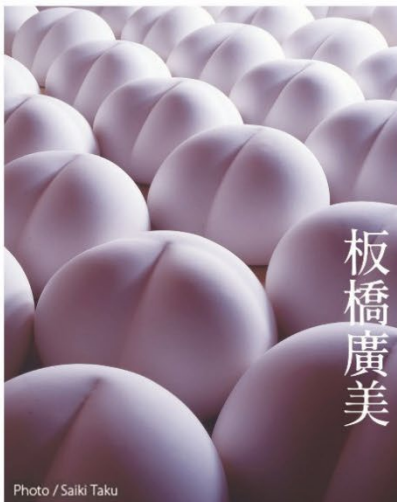
古川美術館分館  
爲三郎記念館  
特別展

陶 六 人

Calligraphy / Ito Keiji



川端健太郎



板橋廣美

Photo / Saiki Taku



伊藤慶二

Photo / Kodera Katsuhiko



松永圭太

Photo / Yokoyama Masaki



桑田卓郎

Photo / Kuwata Takuro



新里明士

## 【展覧会情報】

### 爲三郎記念館 特別展「陶六人」

出品作家：伊藤慶二、板橋廣美、川端健太郎、新里明士、桑田卓郎、松永圭太

開催日時：2026年8月21日(金)～9月20日(日)10:00-17:00(最終入館は16:30) 休館日：月曜日

会場：爲三郎記念館(古川美術館分館)

主催：公益財団法人 古川知足会

助成：公益財団法人 十六地域振興財団

後援：愛知県教育委員会 名古屋市教育委員会 多治見市 多治見市教育委員会

土岐市 土岐市教育委員会 中日新聞社 スターキャット株式会社

入館料：一般1,200円 高大生500円 中学生以下無料 ※古川美術館と爲三郎記念館の共通券

爲三郎記念館単館券600円



《展覧会概要》 美濃の土と向き合い、その可能性を切り拓いてきた六人の陶芸家——伊藤慶二、板橋廣美、川端健太郎、新里明士、桑田卓郎、松永圭太による特別展を開催します。陶芸・絵画・現代美術を横断しながら、祈りにも似た造形世界を築いてきた伊藤慶二を中心に、多治見市陶磁器意匠研究所を通じて学び、国内外で活躍をする作家が集います。

板橋廣美による、空気や水の移ろいを象った無釉白磁のオブジェは、静謐な佇まいの中にいのちの躍動を湛えています。川端健太郎は、手捻りによる有機的な磁土に溶けたガラスを流し込んだダイナミックな作品を展開します。新里明士は、光を透かす繊細な白磁によって陶の存在そのものを問い直し、桑田卓郎は、伝統とポップを大胆に交差させた鮮烈な表現で陶芸の常識を揺さぶります。松永圭太は、素材の変容や偶然性を取り込みながら、土の生命力を力強い造形として立ち上げます。いずれも現代アートと工芸という枠をこえ、革新的な世界を生み出した気鋭の作家たちです。

会場となる爲三郎記念館は、1934年築の数寄屋造りの日本家屋。90歳を迎えた伊藤慶二と同じ時代を歩んできた空間で、伝統と革新、静謐と躍動が響き合います。それぞれの感性で“陶”の世界を更新し続ける六人の表現を通して、現代陶芸の新たな地平をご覧ください。



## ■伊藤慶二（1935－）

戦後の日本の現代陶芸を牽引しながら、陶芸という領域そのものを問い続けてきた作家である。絵画やインスタレーションなど、素材やジャンルを自由に横断し、土という素材を通して人間の存在に向き合ってきた。その探究は90歳を迎えた現在もなお続いている。本展では、伝統的な格調高い意匠が施されたひさごの間に展覧する。

《展示》ひさごの間(8畳・6畳)



「伊藤慶二 祈・これから」展示風景 ※参考作品  
2025年 岐阜県現代陶芸美術館  
撮影/小寺克彦  
写真提供/岐阜県現代陶芸美術館



《点紋鉢》(部分)  
高19.2 幅24.3 奥行22.5cm  
2010年 撮影/小寺克彦

## ■板橋廣美（1948－）

柔らかな曲面を持つ無釉白磁のオブジェは、「空気」や「水」といった形のないものの移ろいを象り、静謐な佇まいの中にいのちの躍動を宿している。本展では落ち着きある階下の茶室を舞台に独自の世界を展開する。また、伊藤作品との対話的な展示も試みる。

《展示》太郎庵、ひさごの間(6畳)



《白の連想》(部分)  
高19 径36cm 可変作品  
1996年 撮影/斎城卓

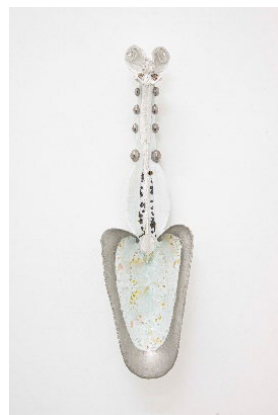


《界》(部分)  
高233 径44cm  
2012年 撮影/斎城卓

## ■川端健太郎（1976－）

手捻りによる有機的な磁土のフォルムと、焼成によって流動するガラス片や金属質の釉薬を融合させ、自然界の生命体を想起させる躍動的な造形を生み出してきた。本展では、モダンな紅色の土壁の間想の間に展覧する。

《展示》間想の間



《Spoon》  
※参考作品  
2022年

## ■新里明士（1977－）

「光器」は、光を透過する極薄の白磁に多数の穴をあけ、透明な釉薬を埋めて焼成することで生まれる。自然光のもとで器が仄かな光を帯び、幾何学的な模様が浮かび上がるさまは、土から生まれたとは思えない軽やかさと繊細さを湛えている。本展では、中庭の竹林を背景とした茶の間に展覧する。

《展示》茶の間



《光器》  
高26.2 径42cm  
2025年

## ■桑田卓郎（1981－）

陶芸の伝統技法を出発点としながら、梅華皮や石爆ぜといった焼成現象を大胆に取り込み、鮮烈な色彩と力強い造形へと昇華してきた。偶然性を積極的に創作へ取り込むその姿勢は、工芸と現代美術の境界を軽やかに横断している。本展では、数寄の意匠が凝らされた葵の間に展覧する。

《展示》葵の間



撮影/Nishitani Kumi



《CUP》  
8×8×8cm 2026年  
撮影/桑田卓郎



《CUP》 ※参考作品  
各8×8×8cm 2026年  
撮影/桑田卓郎

## ■松永圭太（1986－）

土地の記憶や時間の堆積へのまなざしが一貫して流れている。木や果実、抜け殻を思わせる造形には、地層や年輪を想起させる土肌が刻まれ、長い時間の痕跡が宿る。土と炎が生み出す根源的な力への関心は、松永の制作を貫く重要な主題である。本展では、庭園を望む大桐の間に展覧する。

《展示》大桐の間(8畳)



撮影/野村知也



《蛭(もぬけ)》 ※参考作品  
高37 幅43 奥行37cm 2025年  
撮影/横山将基



《果実》 ※参考作品  
高23.8 幅26.8 奥行22.8cm  
高13.3 幅24.3 奥行19.2cm  
2026年

全てのイベントには、参加費とは別に各会場の当日入館券が必要です。

■ アーティストトーク 予約不要

日時: 8月22日(土)11:00～ 板橋廣美 ※伊藤慶二先生との思い出を語ります  
9月13日(日)11:00～ 新里明士、松永圭太 ※ご自身の作品について語ります  
場所: 爲三郎記念館

■ 学芸員によるギャラリートーク 予約不要

日時: 9月1日(火)、9月16日(水) 11:00～ 場所: 爲三郎記念館

■ 特別茶会「知足庵×現代作家茶碗席」 要予約

—伊藤慶二、板橋廣美、川端健太郎、新里明士、桑田卓郎、松永圭太—

伊藤慶二の茶道具、国内外で活躍する「陶六人」の茶碗を使用する、極めて希少性の高い席です。

日時: 2026年9月4日(金)、5日(土)

各日5席 ①10:30 ②11:15 ③13:00 ④13:45 ⑤14:30

場所: 爲三郎記念館 庭園茶室「知足庵」

定員: 各席6名

参加費: 4,000円(別途入館料必要) 創作和菓子+薄茶一服

広報画像

下記画像データご希望の場合は御連絡ください。メールにて送付します。  
各作家の個別の画像もご提供可能です。



①伊藤慶二筆「陶六人」あり



②「陶六人」作品画像

【お問い合わせ】

公益財団法人 古川知足会 古川美術館・分館 爲三郎記念館

電話052-763-1991 FAX052-763-1994(学芸課)

〒464-0066 名古屋市千種区池下町2丁目50番地

【アクセス】名古屋市営地下鉄 東山線「池下」駅より徒歩3分

展覧会担当学芸員 おやいづ 小柳津 綾子(a\_suzuki@furukawa-museum.or.jp)